

ノ

イ

立
音

ズ

ある日、私は透明人間になりました。

教室に入った。

「おはよー」

いつもどうりの挨拶をする。

だが、クラスのみんなからの返事は無い。

だから、しょうがないので私の友達が集まっているところに走っていく。

「おはよー」

また同じように挨拶をする。

一瞬だ。ほんの一瞬、冷たい何かが集まりに通った。

みんなが何か言いたいそうにこっちに顔をむけ、口を開けようとする。

瞬間、何かを命令されたかのように口を閉め、何かを話し始める。

私だけ蚊帳の外だ。

もう一つの集まり。(私のクラスには女子グループが二つある。)に向かう。

そこは、さっき私の友達が何か言いたそうなのをやめさせた人がいると思う。

「・・・お、おはよー。あ、あのさー」

挨拶をして、話そうとしたが、無視された。

すごい、無視のされ方だった。本当に、私なんかに目もくれずしゃべっていた。

その日から、私は透明人間になった。

透明人間としてすごした初日、家に帰った私には冷たい汗しか残らなかった。

なぜ、そうなったのかを一つ一つ思い出そうとするが汗しか出ない。

足が少し震えた。

得体の知れない何かが怖かった。

すぐにお風呂に入り気をまぎわらそうとした。

少しだけ気がまぎれたが、やはり冷たい汗が出ない。

お母さんに晩御飯で呼ばれる。

変な姿を見られないよう、すばやく食べ、はきそうになるのを我慢して自分の部屋へと戻る。

原因推測をぶちまけた。

だが、

分からない。解らない。判らない。

なぜ、自分がそうなったのか。

友達にメールを打つ。

朝のことを思い出す。

吐き気と汗が邪魔する。

裏染まり

次の日、私の気分はさすがに良かった。なぜ、あんなに汗や震えがとまらなかったのが逆に不思議な気分だった。

学校に着くといつものように挨拶をし、集まりへ行く。

口を開け、言葉が出そうになったとき、まさに、私とその集まりに近寄ってもないような空気が流れていた。

このまま声を出しても意味は無く、虚しく空気を振動させて消えるだけでしかないと感じた。

まさに、私はここに存在しないような。

でも、声というのはでしまい、イヤでも私の存在が否定されるような空気が流れるのかと思った。

「っ、おはよー」

「、おはよー」

返事がされた。

一瞬変な気分になった。

でも、安堵のほうが、でかった。変な気持ちはそれに包み込まれてしまい、どこかへいった

。

「それでねー、」

また会話がはじまる。

それを聞いているが、何かおかしいかった。

話がこちらに来ない。

中にいるのに蚊帳の外。

みんなの話を聞く一方。

何かいったら、「へーそうなんだ。」で話が無理やり終了させられる。

無理やり傍観者にさせられる。

掃除の時間。

私は体育館の周りを掃除する。

「――、で、ほ、～」

何を言っているのかはわからなかったが、体育館裏から声がした。

なんだとおもい、行ってみると数人の女子が掃除道具片手に集まった話していた。しかも、全員私の友達だった。

「――、～。真理。ほんと、うざい。」

遠くのほうにいるのに自分の名前が出てきた瞬間、会話がクリアに聞こえてきた。

「あー、わかる。今まで何で仲良くやってきたんだろうみたいなの？」

「そーそー。それでさあ、」

私の友達が私の悪口を陰で言う。信じていたものに裏切られる。

また、同じ汗が出そうになった。

逃げた。

その場から私は逃げた。

そこから中庭へに行く。

体育館と中庭はつながっていて少し歩けばすぐに着く。

ここの中庭は人気は全く無く、雑草が好きなのでけのびのびと育っている。

そこで、震える手を沈めようとする。

「なあ、」

「なに？」

そのとき、どっかの男子と女子の声が奥で聞こえた。

そちらのほうに目を向けると、二人はキスをしていた

そして男子の顔を見て吐き気がした。

なぜなら、そいつは私の彼氏だった。

「っ」

嗚咽をこぼしながらもそこから逃げる。

そのまま教室にいき終礼をしおわったら気分が悪いのを気づかれないよう足早に家に帰る。

どうして？

何で？

意味が分からない。

何で私だけ？

自分の部屋のベッドで嗚咽と振るえを感じながら。

どうして！？

あまりのことに喉から突き破って大音量の声として出てしまう。

家に響く。

誰もいない家に虚しく響く。

トン

壁をたたく。

タン

たたく。

ダン

たたく。

たたく。

たたく。

だが、家は何も答えてはくれない。

そう、

これは、

ただ、

あいつらには、

届かない、

ただの、

戯言。

誰にも届かない、

ただの、

戯言。

頭痛

目が覚める。

カーテンの隙間から漏れる光と風。

ベットから起き上がり、リビングに向かう。

そこには誰もいない。

親達は共働きで、母親は夜帰ってくる。父親はいつ帰ってくるかは分からない。

食卓の上には食べかけのパンと飲み干されたコップと茶渋のついたポットくらいだ。

時計を見ると短針が9のちょっと前をさしていた。

床にほり投げられた新聞を拾い日時を見て今日の日をちを確認する。

今日は学校が休みだ。

とても清しい。

気分も悪くない。

ふと、昨日の出来事を思い出す。

聞きたくなかった陰口と、

今や、

目に焼きついたキスシーン。

ため息が出て来る。

リセットは別の話として、

もう、頭が痛いよ。

担任教師の声が今日の連絡を言っている。

ホームルームが終わる。

合間時間に集まりができ、何か話している。

それに私も加わる。

聞く一方の話に少しだけ自分からの話も言う。

陰口は強くなる一方だ。

私はただ、無理やり集まりの端っこにいる。

ある日、私は無理やり端っこにいる集まりから抜けて本を読みながらそれを観察する。

話は何も変わらない。

ずっと話している。

たまに、集まりの中から誰かが抜け、誰かが入り、誰かに話を振る。

それらは、今、私がいたときと何も変わらない。

もし、あの中で誰かがいなくなったら、集まりの雰囲気は少し変わるのに、今、私がいても、いなくても、変わらない。

誰か気づきませんか？

そこに私がいなこと。

そもそも、居ないほうが、

当たり前でしたね。

老父

これは、夢だ。

夢の中で私はそう理解しながら、立っていた。夢の中で。

目の前に立つは、たった一人の老父。

この人はどこかで見たような気がする。

「そうか。」

老父の声が聞こえる。

その言葉を聞いた瞬間、じぶんの中で透明人間になってからの過去を思い出す。

それらが、すべて頭にぶち込まれる。

「そうか。」

老父はまるで、私の過去を知っているかのような口だ。

「どおりで、」

老父が口を開けるたびに考えたくないことが、浮かび上がりそうになる。

「一人じゃ、

笑えない。」

目が覚めた。

気がつけば、枕が濡れていた。

そして、一つ頭に浮かんだことを思い出す。

もし私が、このままあのグループに入らないようになったら、私は存在しなくなるのではないか？

あの、陰口が、私にとっては存在意味。

まさに、今、私は、一言言いた。

内緒の悪口、

ありがとう。

そう思った瞬間、私は張り裂けた。

学校へ行く。

私は、ただ、じぶんの存在のためだけに、今、あの集まりに入る。

ごめんね。

それでも、

端っこでいいから

座らせて。

そうやって、エスカレートする悪口で自分の存在確認をする。

登校中
交差点で
人ごみの中急ぐ
サラリーマンが
今、確かに
半身で
よけたんだ。

今、私はここに！

後書き

えと、初の投稿なのですが、中二病過ぎ増しかね？

一応、この話の元ネタは、インビジブルという歌からとりました。

なので、所どころ、歌詞が載ってんですけど・・・、8割ぐらい歌詞ですね。認めます。

本当は、「大嫌い嫌い嫌いな僕が見えますか？ルンパッパ」のところをどっかに入れたかったんですけど・・・

ルンパッパが・・・、ねえ。

きつかったです・・・

そのほかには・・・

あれ！？なんか、途中から記憶があやふやに！？

・・・

すみません。

あ、それでは最後に、

この本(?)をお読みになって、わー面白いなど、最後まで読んでいただいていた方には感謝です。

どうもありがとうございます。

それでは、たまにポツポツやっていきますのでどうか、これからもよろしくお願いします。

つか、主人公の名前、最終的には出しそびれたなあ。

あれには書いてんのに・・・